

「住宅事情が変わって建具職人の仕事が減り、それに伴い組子細工を入れる場所もどんどん少なくなっています。」

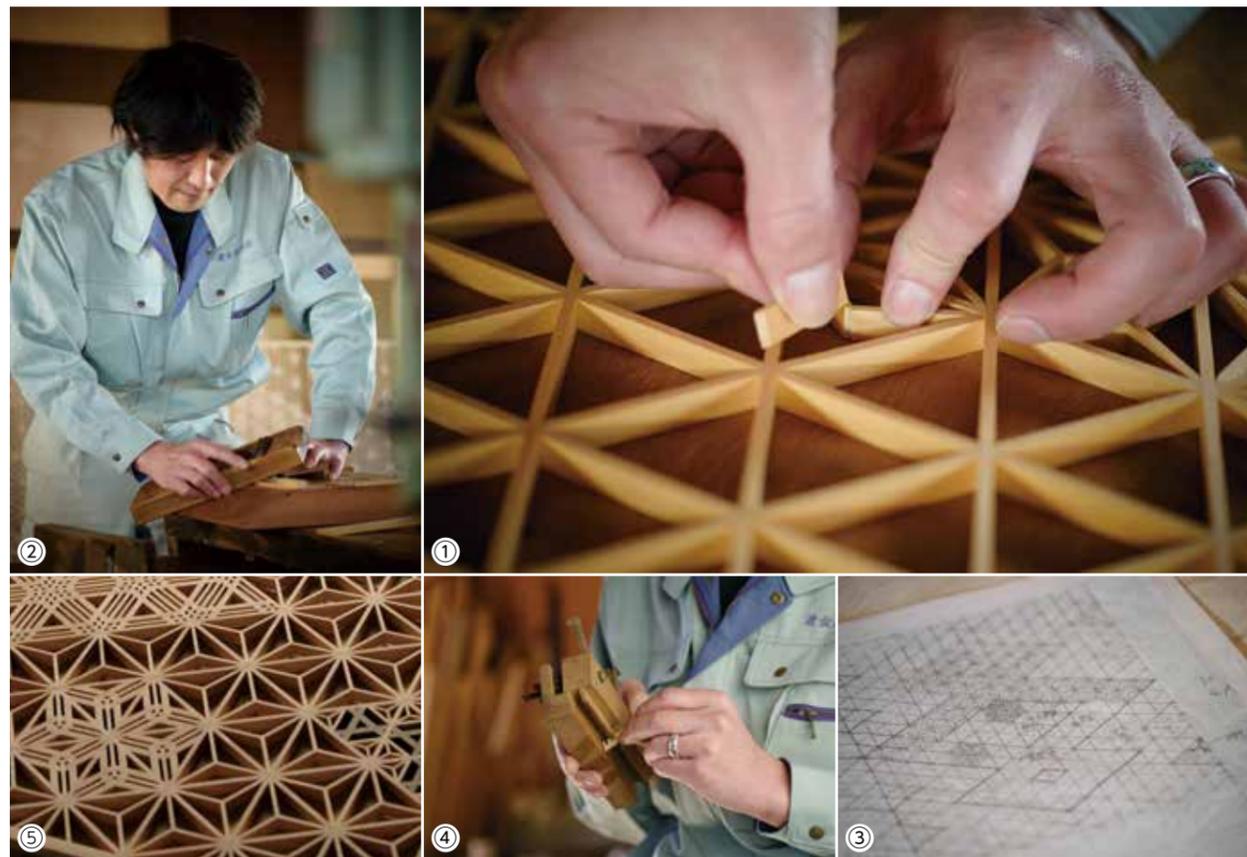
さて、組子細工の起源は古く、飛鳥時代までさかのぼります。まさに日本が誇る伝統文化です。大正中期に創業した渡会建具店では、4代にわたって技術を受け継ぎ磨きをかけてきました。しかし、技術の継承が難しい時代になったと利一さんは言います。

「住宅事情が変わって建具職人の仕事が減り、それに伴い組子細工を入れる場所もどんどん少なくなっています。」

さて、組子細工の起源は古く、飛鳥時代までさかのぼります。まさに日本が誇る伝統文化です。大正中期に創業した渡会建具店では、4代にわたって技術を受け継ぎ磨きをかけてきました。しかし、技術の継承が難しい時代になったと利一さんは言います。

「二からすべて作り上げるところが、組子細工の面白さ。簡単な文様ではなく、どんなに手間がかかっても凝った文様に挑みたくります。やっぱりみんなに『きれいだな』と思ってもらうには、それだけ手間をかけないとね」と語る渡会さん親子。

「二からすべて作り上げるところが、組子細工の面白さ。簡単な文様ではなく、どんなに手間がかかっても凝った文様に挑みたくります。やっぱりみんなに『きれいだな』と思ってもらうには、それだけ手間をかけないとね」と語る渡会さん親子。



①手作業で地組にパーツを一つ一つはめ込む ②カンナでパーツに微妙な角度を付ける ③方眼紙に文様をデザイン。寸法の計算も書き込まれている ④特殊なカンナで溝を掘る ⑤美しい文様の世界が生まれる

です。これだけ精巧に作るとなると、まず良質な木材を見極めることが重要なのだと利一さんが教えてくれました。

「よく使うのはヒノキ、ヒバ、ホオノキ、神代杉です。柾目がきれいで、反りがなくまっすぐで、適度な油分がある最高級の木材。魚にたとえればマグロの大トロだね。だから値が張って、障子の棧一本ほどの木材が仕入れ値で何千円もするんですよ」

木材の中でも特に希少なのが神代杉。これは、長年土の中に埋もれていた杉を掘り起こしたもので、深みのある黒色が特徴です。白木と組み合わせるとコントラストが際立ち、組子細工に多彩な表情を与えてくれます。



いくつもの道具を使い分ける

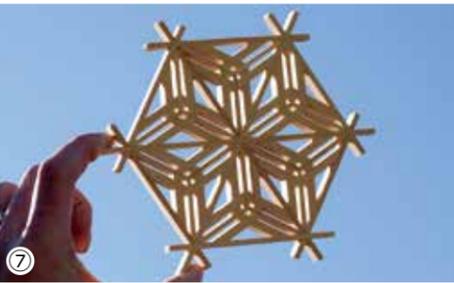
細かい作業を延々と積み重ねて

さあ、次は工房で一連の工程を見せようことにしました。まず、方眼紙に文様をデザインすることからスタート。伝統的な文様をどう配置し、何種類もの文様をどう組み合わせるか、職人のセンスが問われます。次に、仕上がり寸法に合わせて、地組や葉のサイズを計算します。それを元に設計図を作り、大きな板に

実寸大で下書きをします。そこまでの下準備ができたら、いよいよ木材の加工です。ノコギリや自動カンナ機を使い、必要な長さや厚みに切り分けれます。もし干網のような曲線のパーツが必要な場合は、木材をお湯につけて曲げる作業も加わります。次にその部材に印をつけ(墨付け)、地組や葉のパーツとなる細木を切り出し、特殊なカンナで溝を掘ったり断面に角度をつけたりします。

こうして材料が揃ったら、ようやく組み込み作業となります。作るものが襖一枚分もの大きさとなると、先ほどのコースターとは比べ物にならないくらい複雑で神経を使います。

「父や祖父から、組子細工が一番大事なのは正確さだと教えられました。0・1ミリズレると最終的には大きなズレが生じてしまいます。また、たとえ地組が上手くいったと思っても、実際に何か所か葉をはめ



⑥木材や加工用の機械が並ぶ工房 ⑦飾り組子のコースターを空に透かして見る ⑧文様のシルエットが美しい

穏やかな語り口ながら、揺るぎない職人魂が伝わってきます。

二人が手がける組子細工は、注文を受けてから現地で採寸し、デザインを考えて作り上げる一点物。一つひとつに最高水準の職人技が注がれており、できあがるまでに数か月かかることもあります。仕事をしていた一番うれしい瞬間は、完成した組子細工を見て喜んでくれたときだといえます。「去年、お客様から玄関正面の間仕切り戸に組子細工を入れてもらいたいと注文をいただきました。図面を見て頭では分かっていたけど、実際に家に取り付けてみると期待以上だったのでしょうか、一目見て驚いた」と電話口で大喜びしてくれました。

てね。仕事をさせてもらって、代金をいただいて、おまけに感謝されるのだから最高ですよ笑)」

改めて組子細工の魅力を利用の人に聞いてみると、「日が当たると文様が浮き出るように見え、夜に照明をつけるとシルエットが美しく、暮らしの中で多彩な表情を楽しめるところ」だそうです。また「一人でも多くの市民の皆さんに、組子細工を見て興味を持っていただけたらありがたいです」とも語っていました。

皆さんの周囲で、または訪れた先などでも、建具のどこかに組子細工が施されているかもしれませぬよ。見つけたときは、ぜひじっくりと眺めてみてください。